地域の底力――和歌山県有田郡有田川町

住民一人ひとりの思いが実を結ぶ和歌山県有田川町（ありだがわちょう）

暮らしやすいまちを目指す行政と、自らの考えで立ち上がった住民たち。その双方の前向きな力が合わさり、和歌山県有田郡有田川町では今、ゆっくりと、そしてしっかりと活性化が進んでいる。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

和歌山県有田川町が誇る美しい景色の代表格「あらぎ島（じま）」は、江戸時代に開拓が行われた棚田。県内では唯一「日本の棚田百選」に選ばれており、2013年には「蘭（あらぎ）島および三田・清水の農山村景観」として国の重要文化的景観に登録された。

環境、教育、子育てを柱にした暮らしやすいまちづくり

和歌山県の中ほどに位置する有田郡有田川町は、二〇〇六年に旧清水町、旧金屋町、旧吉備町が合併して誕生した。その主要産業は、「有田みかん」を要とする柑橘類の栽培。江戸時代に発展した伝統が受け継がれ、二〇二一年には「みかん栽培の礎を築いた有田みかんシステム」として日本農業遺産に登録された。

人口は約二万五〇〇〇人と県内の町村では最多ながら、近年はゆるやかな減少を続けてきた。しかしここ数年、転入者の増加によりそれに歯止めがかかっているという。町内唯一の駅であるJR藤並駅まで、特急利用なら新大阪から直通で約九〇分、和歌山市内まで阪和自動車道有田インターチェンジから約二〇分という利便性もあるが、それだけが理由ではない。旧吉備町の町長を経て有田川町の初代町長に就任した中山正隆氏に、その背景について伺った。

「若い世代が暮らしやすいまちづくりを目指し、合併直後から柱にしているのは環境、教育、そして子育て支援です。まずは子どもたちが学ぶ場の環境整備が大事だということで、就任後は真っ先に幼稚園から中学校までクーラーを設置しました。その結果、夏場でも十分な授業時間が確保できたことに加えて、夏バテを回避できたことを通じて子どもたちは給食を残さないようになりました」

他にも学童保育や図書館の充実、高校生までの医療費無料化など、教育、子育てには多くの予算が割かれている。

環境面では、資源ごみの活用に注目したい。町の随所に「ごみステーション」が設けられ、住民が分別を徹底したことで、それまでは仕分けに約三〇〇〇万円かかっていた費用負担が、逆に資源ごみの売却により三年間で約八〇〇万円の収益となった。

「分別には手間がかかりますから、町民の皆さんのご協力があってこそのことです。職員が幾度も足を運んで話し合いを重ね、ご理解をいただきました。今では子どもたちも、細かいごみの分別を当たり前に思ってくれています」

二川ダムの維持放流水（注）を利用した小水力発電は、画期的な試みだった。約三億円が建設に費やされたが、完成後は売電により年間約五〇〇〇万円の収益を生んでいる。これは役場職員の意見を実現させたもので、町の創生総合戦略も職員の提案を受けて四〇歳未満の若手が手掛ける。

「さまざまな施策により人口減少を抑えて2060年にも人口2万人の確保を目指す中、5年ごとの『人口ビジョン』を設定しているのですが、現状では2025年の目標値を上回る結果が期待できそうです」と話す町長の中山正隆氏。

町のあちらこちらに設けられた「ごみステーション」は、それぞれの自治会が管理。細かいごみの分別で町の経費が削減されたことにより「低炭素社会づくり推進基金」が生まれ、「太陽熱利用設備補助制度」「コンポスト容器の無料貸与制度」などの新制度が設けられた。

有田川に建設された二川ダムの維持放流水を活用する小水力発電は、新エネルギー財団による「平成28年度新エネ大賞」で資源エネルギー庁長官賞を受賞した。

（注）維持放流／自然環境保持の目的等で行われる、河川の流水の機能を正常に維持するための放流。

鎌倉時代の僧・明恵上人は有田地域の出身。鷲ヶ峰の中腹、明恵上人が修行を重ねた場所は「神谷遺跡」として国指定史跡に。標高586メートルの鷲ヶ峰は、頂上から町を広く見渡せ、コスモスやツツジの名所としても知られる。（写真提供：有田川町）

「役場の幹部たちには、若い世代の声はとにかく一回取り上げてくれと言っています。また、予算がないからという理由だけでアイデアを否定すると、前進できない。困難があっても、『やろら（やろう）』となればさまざまな工夫をみんなで考えて進んでいける。住民の皆さんには、自分たちが住む町は自分たちでよくしなければいけないとお話ししています。行政が主導するのではなく、まず自分たちで考える。それを町がサポートする。実際、有田川町には今、そういう主体的な住民がたくさんいるんです」

二〇一五年には、官民の連携により環境を立て直し「全米でもっとも住みたいまち」と称される米国オレゴン州ポートランド市と連携が結ばれた。ポートランド市と、互いに行き来して行われた講演会やワークショップは、有田川町の住民が主体となった活動につながった。

あらたな手法を取り入れ伝統的な産業を受け継ぐ

自分で考えて立ち上がった住民のひとりが、「みかんのみっちゃん農園」の小澤光範氏だ。江戸時代から続くみかん農家に六代目の長男として生まれたが、供給過多による値崩れから家族が苦労する姿を見ていたこともあり、当初は家業を継ぐつもりはなかった。大学は農学部に進学し、紆余曲折を経て青果物を扱う企業に就職した。

「そこでは全国の農家さんとの出会いがあり、販売方法や規模、取り組み方などさまざまな農業スタイルが見えてきました。これから消費者と生産者がより密につながる時代が来るから、やり方次第で農家は稼げる。長男なら地盤も機械もあるし、絶対に継いだほうがいい。出会った農家さんからそう言われたのも、心に響きました」

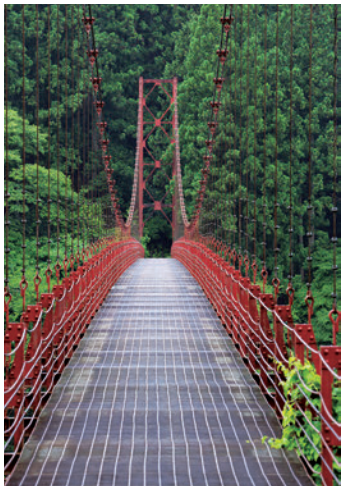
二〇一六年、父の背中を追いながらみかん畑で働き始めたが、しばらくは試行錯誤の日々が続く。

「みかんの木の栽培は、三年、五年、十年と、先を見据えた仕事をしなければなりません。雑に扱えば、それが後々返ってくる。自分が育てたみかんがおいしいとお客様から言われるようになったことで、自分がつくりたいみかん、やりたい農業についてあらためて考えるようになりました」

同じ有田地域でも場所により継がれてきた栽培方法は異なり、これまでは他所の技術を取り入れることはまれだった。だが、小澤氏は関心をもった農家の手法を学び、収穫量を増やしていく。さらには

果実のみならず、有田みかんはジュースをはじめ多様に加工、商品化されてきた。写真は有田川町グリーンツーリズム推進協議会の公式ウェブサイトオープンの際、記念プレゼントとして使われた「絵本のまち有田川 みかんジュース」。

「みかんのみっちゃん農園」の小澤光範氏は、みかんを含めた約60種類の柑橘類の栽培にいそしむ。学生インターンの受け入れや子どもたちを対象とした講演など、農業の未来のために積極的な活動を行っている。



二川ダムの上流に架けられた「蔵王橋」は、全長約160メートルのつり橋。近年では景観の美しさでも人気を博している。

上／みかん畑が広がるのは、水はけが良く日当たりに恵まれた斜面。機械化されていなかった時代、坂道を上り下りしていた先人の苦労がその礎をつくった。
下／より注目を集めるため、イベントなどでみかんを模した帽子をかぶるなど、小澤氏は自らが広告塔になることも。（写真提供：みかんのみっちゃん農園）

有田川町と隣接する紀美野町に広がる生石高原は、標高870メートル。夏の深緑や秋のススキの時期には、その美しい景色を目当てに観光客が訪れる。

約46メートルの落差があり、和歌山県内では「那智の滝」に次ぐ高さと言われたことからその名が付けられた「次の滝」は、展望台からその全景が臨める。

SNSを積極的に活用した直販でそのおいしさが口コミにより広がり、飲食店や食品メーカーとのコラボレーションも生まれる。コロナ禍ではSNSで直接やり取りを重ねてきたその関係が活き、売り上げが増加した。

外に向けて単独で発信し続けてきた小澤氏が現在、目を向けているのは地元だ。

「自分ひとりがもうかるだけでは、有田みかんという産業は持続しない。EC（電子商取引）やSNSの活用に関して相談を受けたこともあり、同世代の生産者を中心にグループをつくり、生産技術の情報交換や海外輸出を含む新規ビジネスを考えているところです。僕自身がハブになり、人をつなげられると良いですね。現在、若手生産者グループでドローンでの農薬散布の仕組みを考えたりもしています。こうした取り組みが話題になれば、新規就農者や後継者の育成、最終的には有田みかんのブランドを守る結果になると思っています」

危機的状況が生んだ慣習にとらわれない取り組み

有田みかん同様、有田川町が日本随一の産地として誇る特産品が山椒。栽培されているのは、粒が大きいぶどう山椒という品種だ。

そのあらたな試みで注目を浴びているのが、「きとら農園」の新田清信氏だ。実家は農家ではなく、大学進学以降は県外で暮らしていたが、結婚を機に帰郷して二〇一一年に就農する。

「ちょうど山椒に高値がついていた時期で、山椒農家の親戚の勧めもあり、もうかるならやってみようかと考えたんです。しかし、ほどなく山椒の価格が暴落し、収穫は上がっていたものの廃棄せざるを得ない状況に陥りました」

それまでは栽培して卸すだけだったが、危機的な状況の中で新田氏は山椒の粉末加工、直販という自立に活路を見いだす。

「摘んだばかりの新鮮な山椒は緑色ですが、時間が経つと茶色に変わります。採取したばかりの鮮やかな色のままの山椒を、加工して商品として出せるのは農家だけ。それを付加価値として売っていこうと思いました。インターネットを活用した発信、販売などを重ね、お客様と直接やり取りするうちに品質を評価していただけるようになり、より上質なものを、という思いも生まれてきました」

実際、きとら農園の粉山椒は、すがすがしい香りと辛さが際立っていた。ここ最近は、海外で、あるいはスイーツや、クラフトビール、クラフトジンの業界など山椒の需要が広がっているうえ、供給量が減ったことで価格は再び高騰している。

「一方で、約二〇〇軒ある栽培農家の平均年齢は八〇歳と高齢者が

「ぶどう山椒の存在や風味の魅力を、よりアピールして広めていきたい。それは自分の利益につながるだけではなく、将来的には産地を守ることにもつながると思っています」と話す、「きとら農園」の新田清信氏。

左／粒の大きさだけではなく、ぶどう山椒は風味も通常の山椒より強い。
上／新田氏が栽培から加工まで手掛ける、ぶどう山椒を石臼でひいて粉末にした商品と、自然林で採取した桑の葉茶。桑の葉茶は血糖値の上昇抑制などに効くといわれる。

「よみきかせ隊養成講座」の受講後、もう１年活動すると、保護者を対象とした絵本に関するアドバイスを行える「絵本コンシェルジュ」の資格が取れるという、ステップアップを図れる仕組みになっている。　（写真提供：ALEC）

多く、存続が厳しい状況ですから、今は何とか産地を守っていきたいという気持ちで移住就農インターンも受け入れています」

新田氏は山椒畑の周辺に広がる天然の桑にも着目。この桑は養蚕が盛んだった時代の名残で、かつて地元でつくられていた茶葉の製法を学び、桑の葉茶の販売も始めた。

「蒸しの工程では間伐材や倒木を乾燥させた薪（まき）を使用するなど、無駄を省いたことで結果的に環境負荷の小さい形になりました。徐々にそういったことも意識するようになり、ぶどう山椒も、一部を有機栽培に切り替えました」

その地道な尽力は、二〇二二年六月に「第二一回わかやま環境賞」で最優秀賞をもたらす。

「山椒に限らず、今や第一次産業は加工から販売まで手掛けないと生き残れないのかもしれません。しかし、それがビジネスとして成立し、農業でも稼げると証明できれば、自分のように地元で就農して後に続く人が出てくるのではないかと期待しています」

子どもたちの心を豊かに育む絵本が日常にある生活

実は、有田川町は絵本の世界では広く名の知られる存在だ。著名な作家のワークショップや個展、町主催の絵本コンクールが開催され、「絵本のまち」を提唱している。きっかけをつくったのは、有田川町地域交流センター「ＡＬＥＣ（アレック）」のセンター長で司書の資格を持つ杉本和子氏だ。

「家庭の事情で教師になる夢を自分があきらめたこともあり、夢をかなえられる強い子どもが地域に育ってほしいという思いを、絵本の読み聞かせを始めた頃から抱いていました」と、有田川町地域交流センター長の杉本和子氏は話す。

「合併前、旧金屋町の文化保健センター図書室で勤務していた頃の来訪者は日に数えるほど。地元の生活に組み込まれていないことを実感する中、司書として自分にできることを考えたときに思い立ったのが、絵本の読み聞かせでした。さまざまな講座を受講してノウハウを学び、ボランティアの協力も得ながら活動を進めるうちにやがて、著名な絵本作家さんを招いたイベントを開催するまでになりました」

合併後の二〇〇九年に、図書機能にカフェや遊び場などを備えた有田川町地域交流センターが完成。絵本で有田川を全国に発信するという声が上がり、「絵本のまち」というキャッチフレーズが生まれる。

「その言葉を意識していようがいまいが、町の子どもたちにとっては常に絵本が身近にあり、作家さんのイベントやワークショップに参加できるのがふつうになっている。それを当たり前だと感じられるのは、幸せなことだと思っています」

絵本を家庭に配達する「おうち

絵本作家を招くなどのイベントは、地元民だけではなく広く町外からも参加者が集まる。（写真提供：ＡＬＥＣ）

有田川町の地域交流センター「ALEC」は図書機能を要としつつも、カフェや読書や原画展を楽しめる施設。子どもたちが遊べる屋外のコーナーなどを有し、幅広い世代がひとときを過ごせる。

住民が自由に絵本を借りられる「まちかど絵本箱」の一つ。モチーフは絵本作家の長谷川義史氏。

左から「有田川女子会 UP Girls」の岩本奈央子氏、楠部睦美氏、天津やよい氏。3人が立つのは、楠部氏が営む2016年創業の民宿「もらいもん」。親戚からこの建物を譲り受けたことが、楠部氏のUターンにつながった。

女子会が制作した「shiyola」と「ASOBOLA」は、男性でも手に取りやすいデザインを心掛けたという。「shiyola」の裏表紙にある、「種を蒔(ま)かなければいつまでたっても花は咲かない」というメッセージが心に残る。

絵本箱」、町内のあちらこちらで自由に絵本を借りられる「まちかど絵本箱・絵本館」など、読み聞かせから始まった活動は広がり続けている。

「うちの町でもこんなことをしてほしいという、町外の声も聞こえてきます。絵本が決定打になるわけではありませんが、移住先には教育的な取り組みがある地域を、と考える方は多いですね。今後の課題は取り組みの継続ですが、ボランティアを育成する『よみきかせ隊養成講座』は、五期目の二〇二二年までに約一〇〇人の参加者を数えています。これまで、多くの人の前向きな姿勢に支えられてきましたが、センターのスタッフを含め、私の周りには何かあたらしいことに対して『やらんとこう』とはならないのが面白いですね」

女性たちが手掛けた冊子が地元に再発見の扉を開く

有田川町を初めて訪れた際、おそらく多くの人が手にするのが、グルメ、特産品、人、暮らしなど、多角的な町の紹介を盛り込んだ八〇ページに及ぶ冊子「shiyola(ショラ)」だ。タイトルは方言で、「〜しよう」という意味。その制作は「有田川女子会UP Girls」が担い、町が出版費用を負担した。

女子会の誕生は、二〇一六年。発端はポートランド市との連携から続く流れで行われた、二〇〜四〇代の女性を対象としたフォーラムだった、と振り返るのは楠部睦美氏だ。

「『女性が住みたいまちづくり』という町が掲げる目標に対しての意見交換の際、行政に言われたからではなく、自分たちで主体的に動こうという話になりました。このままでは先細りになるかもしれない未来に対して、皆、何かしら思っていたからでしょう」

約四〇名の会員の経歴はUターン、Iターンを含め多様。コミュニケーションを重ねながらワークショップ、映画や漫画、郷土料理といったそれぞれが好きな分野を活かした分科会などが開催されてきた。

「shiyola」の制作では、取材、撮影から編集まで、すべてが初めての作業だったため苦労はあったが、初版の三〇〇〇部が一年足らずでなくなった。現在もPR資料や情報誌としてニーズは強い。

「意外だったのは、有田川にはこんなに良いところがあるんだと、まずは町外から反応があったことでした。町内からも、再発見できたという声が多くあり、うれしかったですね。私たち自身も、なにげない景色などあらためて町の良さを知るきっかけになりました」

そう話す楠部氏は、Uターン組だ。一方で同じく編集に携わった岩本奈央子氏は、これまでほぼ地元から離れることなく暮らしてきた。

「長く住んでいればいるほど、町の良さには気付きにくいかもしれません。何もないと思っている人は案外いますし、私自身、この町では住民が参加できるイベントが多数あることを知らずにいました。冊子を手に取った方が、この町の魅力に触れてくれると良いですね」

「まちのリビングルーム」をコンセプトとした「THE LIVING ROOM」。閉園した保育所を再活用したもので、地元の若手を中心とした地方創生グループ「AGW」が中心となり、住民がアイデアを出し合って、開設に至った。ここにあるパン屋「グランアヴニール」(左)やカフェ&バー、クラフトビールの醸造所には、町外からも人が訪れる。

小水力発電やゴミステーションと併せて町の環境政策の一翼を担っているのは、ユーラス有田川ウインドファーム。

二〇二〇年には、さらに深掘りした「ASOBOLA（アソボラ）」を制作。現在は役場の依頼を受け、移住者に特化した「sumola（スモラ）」の二〇二二年内の完成を目指している。その取材を担当した天津やよい氏は、二〇一九年に県内から移住した。

「仕事がきっかけで赴任しましたが、その任期が終わってもまだ住み続けたいなと思えるほど楽しく過ごしています。事業をされている方をはじめ、女子会の活動を通してすてきな人と知り合えたのも大きい。この町は特定のコミュニティーの枠を超えて人がつながり、プラスアルファの部分を一緒に取り組んでいるという印象がありますね」

コロナ禍により現在は活発に動けないものの、楠部氏は女子会の未来をこう語る。

「ポートランド市を個人的に訪れた際、住民の皆さんが自分たちの暮らしを楽しみ、町に愛着を持っているのが伝わってきたのが印象的でした。女子会の次の展開にまだ具体策はなく、継続は容易ではないかもしれませんが、まずは自分たちが日々を楽しむことが、次の世代につなげていくうえで大切なのではないかといつも思っています」

2002年に廃線となった有田鉄道の旧御霊（ごりょう）駅跡は、多数の絵本作家の手によりカラフルに再生。旧御霊駅を含む有田鉄道跡は、歩行者・自転車優先道路「ポッポみち」として整備され、絵本作家の作品で多数彩られている。

交通網の基点として住民が行き交うJR藤並駅構内には、絵本を読める「まちかど絵本館」が設けられている。

町に根付こうとしている若い世代の移住者の増加

有田川町を巡る中で気付いたのは、役場の周辺や基点となる藤並駅周辺の吉備地区で新築中の家屋が多いこと。町長の中山氏にそう伝えたところ、笑顔が返ってきた。

「おかげさまで二〇代、三〇代の若い世代を中心に移住者が増え、しかもその多くが、マンションやアパートではなく一戸建ての持ち家を選ばれている。うれしいですね。二〇二一年九月には初めて、前の月に比べてわずかながら町の人口が増加に転じました。中でも吉備地区はここ数年で人口が一五〇〇人ほど増え、小学校で教室が足りなくなっているくらいです。実際に有田川町に来て喜んでもらえる、暮らしやすいまちづくりをこれからも推し進めたいと思っています」

農業、林業従事者が多く自然豊かな金屋地区、清水地区は人口減が課題だが、交流人口の増加を目指したグランピングや温泉施設のリニューアルが検討されている。

有田川町では、初夏に白い花で覆われ、秋には黄色い実をつけるみかん畑の景色の美しさにも、人々が魅了されるという。お会いした方々は皆、自分のことだけではなく広く町を、そして未来を考えていたのが共通していた。その思いは先々、どのような花や実をつけるのだろうか。農家が手間暇かけたみかんの木が育つようにゆっくり、そしてしっかり、有田川町は前向きに進んでいる。

みかん畑がある高台から眺めた有田川町の景色。みかんの花の季節には、その香りが町を包むという。